

## 最近の日本における沈従文研究

小島久代

四半世紀前の一九八五年三月二〇日から四月二日までの約二週間私は香港経由で長沙の湖南師範大学を訪れ、沈従文研究者凌宇氏のお世話で、湘西旅行を果たした。詳しくは「湘西旅行記」<sup>①</sup>としてまとめた。このたび全く思いがけず、その湖南師範大学から同大学主催の「中国現代京派文学研究六十年国際学術研討会」に招待され、五年ぶりに中国を再訪するチャンスに恵まれた。二〇〇九年十一月六日から十一日までの日程は、七日丸一日の学会のあと、八日から十日まで三日間という駆け足で長沙から湘西までの長距離バスによる視察旅行にも参加した。<sup>②</sup>

前回の湖南訪問後、凌宇氏からの要請で『吉首大学学报』に「沈従文研究在日本」<sup>③</sup>を寄稿したが、日本語でも書いておいてほしいという声があったので、二十年ほど後に、これに少し手を加えて「日本における沈従文研究（一九二六〜八六年）」と題して発表した。<sup>④</sup>今回はその続編ということになる。なお、今回の湖南師範大学における発表のために「日本近期的沈従文研究」という一文を草したが、これは二〇〇九年四月のお茶大中文学会で発表した内容を簡単にまとめたものである。本稿はこの報告にさらに加筆した。

岡崎俊夫・松枝茂夫・武田泰淳など「中国文学研究会」のメンバーを沈從文研究の第一世代と位置づけるならば、一九七〇〜八〇年代にかけて研究を始めた城谷武男・小島久代は第二世代と言えるのではないかと思う。沈從文の名誉回復後、一九八二〜八四年に『沈從文文集』全十二巻、『沈從文小説集』第一・第二巻、『沈從文選集』全五巻などが矢継ぎ早に出版されるのに伴い、沈從文を研究テーマに選ぶ大学院生がぼつぼつ現れるようになり、九〇年代頃から彼らが論文を書き始める。この中堅・若手の研究者を、仮に第三世代と呼ぶとしよう。

同世代の城谷武男著『沈從文研究 わたしのばあい』<sup>⑤</sup>についてはすでに書評を書いたので、詳しくはそちらを読んでいただきたい。城谷の沈從文研究は三つの軸があり、それは一、フィールドワーク、二、版本校勘、三、中上健次の物語論の応用と言えるだろう。『辺城』主題考<sup>⑥</sup>は一と三が見事に結実して独自の作品論を作り上げた。『蕭蕭』小論<sup>⑦</sup>では、二の作業の副産物として、沈從文が修正を通じて主人公蕭蕭の形象を時代の変化に合わせていく「常」から「変」へと変化させていったことについての論証を綿密に行っている。中国本国ではこうした地道な研究がほとんどなされず、作品を論じる際にも、初出に当たらず、『沈從文文集』や『沈從文別集』のみによって行われる安易さに対する批判となっている点を評価したい。<sup>⑧</sup>『阿黒小史』論<sup>⑨</sup>ではやはり「油坊」の探訪というフィールドワークからの啓示と丸尾常喜氏の「魯迅—人と鬼の葛藤」<sup>⑩</sup>からのヒントを得て、「阿黒」<sup>⑪</sup>「阿鬼」説を展開している。『沈從文・中上健次対比研究』はアメリカの沈從文研究者 Kinley Jeffrey C. がフォークナーとの対比で沈從文を論じているのに対して、日本人の立場から被差別部落出身者の中上健次を取り上げ、対比研究を行った労作である。ただ一九四〇年代から沈從文が創作不振に陥った原因を三族混血による二面性が、

非抑圧民族の立場に徹し切れなかったためとする観点には、筆者は些か異議を唱えたい。沈従文は確かに一九二〇年代後半の作品に見られるように、支配民族に抵抗する苗族を描くことはなくなつたが、それは沈従文が盧溝橋事件に端を発する日中の全面戦争の展開に伴い、少数民族だけの立場に固執するのではなく、中華民族という立場に立つて共通の敵に立ち向かうべきだとの認識を深めていったからだろうと思われるからだ。本格的な長編小説『長河』が国民党の厳しい検閲のために第一巻は一九三八年に完成していたにもかかわらず、多くの削除を経て一九四八年になつてようやく刊行されたという状況も考えなければならぬであらうし、また、題材や手法についての新たな模索をしていたことも考えるべきではないだろうか。ともあれ城谷武男の『沈従文 わたしのばあい』は、フィールドワーク、版本校勘、対比研究などを駆使し、独自の方法論によつて手堅くまとめられた貴重な成果であることは言を俟たない。

## 二

次に紹介したいのは沈従文研究誌として一九九九年〜二〇〇八年までの十年間出版された『湘西』である。『湘西』は沈従文に関するものであれば、論文・翻訳・評論・資料・随想などを問わず、未発表の原稿であれば何でも載せた。執筆者も日本人に限定せず、中国の沈従文のご遺族・研究者からも毎号広く原稿を集めた。十年間を振り返つて見ると、『湘西』は志を同じくする者が集う、ゆるい絆で結ばれた同人誌であり、毎年日本中国学会前夜祭の後に出席者が顔を合わせる程度で、同人が一堂に会したのは二、三回に過ぎず、あとは専ら誌上での交流ではあつたが、互いに情報を交換し刺激し合つて研究を進めていたといえる。たとえば黄媛玲の研究に触発されて、齊藤大紀の綿密な訳注付きの翻訳「北京の文芸刊行物および作者」(上・下)が生まれたということがあげら

れる。また、二〇〇四年日本中国学会前夜祭の「中国現代文学者の集い」で、神戸大学文学部に外国人教員として来日中の呉曉東氏と富山大学の齊藤大紀という日中兩國の若手研究者による講演会が開催されたことも日本における沈従文研究史上記念すべきことだった。『湘西』への投稿論文では、若手研究者・大学院生による精力的な執筆が目立ったし、現地調査の報告、翻訳が数多く寄せられた。沈従文のご遺族からも沈虎雛氏の父君（沈従文）についての思い出、沈紅さんのおばあちゃん（張兆和）の思い出などが寄せられ、晩年の沈従文の絵画や西洋音楽に対する直感的な好みや批評を知ることができ、張兆和さんが草花を育てることに幾たびもの政治運動で傷ついた夫や家族の心の癒しを求めておられた様子を知り胸を打たれたものである。また、中国の研究者からも多数の貴重な論考をいただいた。とりわけ糜華菱著「沈従文作品中的方言民俗考釈」、劉壯獅・劉壯韜著「沈従文作品中湘西方言釈義」は、沈従文の作品理解を助け、また、翻訳に際しては大いに参考になった。編集業務は第6号が福家道信、今泉秀人兩名が担当された他は、創刊号、第5号、第7号、第10号を齊藤大紀、中野徹の兩名が担当され、出版は白帝社さんをお願いしたことを改めて感謝をこめて記しておく。

### 三

一九九〇年代になると中堅・若手の研究者が次々に登場してくる。中堅・若手研究者の研究の傾向をいくつかに分類して見てみよう。

#### 1. “都市もの” についての研究

第一、第二世代が蘇雪林や岡崎俊夫の沈従文論の影響を受け、沈従文の作品をいわゆる“湘西もの”と“都市

もの”に分けて、前者を高く評価し、後者を駄作として低い評価しか与えず、研究の対象として取り上げなかったのに対して、近年では新資料の発掘などにより、沈從文の習作時代の交友関係や作品についての研究が精力的に進められている。

① 黄媛玲の研究方法は、沈從文が『沈從文小説選集』題記<sup>9</sup>や『從文自伝』<sup>10</sup>において影響を受けたと述べている『聖書』や『新潮』、『創造』（季刊）、『創造週報』などを片端から読み、それらが初期の作品の中にもどのように使われ消化されているかを綿密に比較検証して、沈從文の作品の特徴を探り出そうとしたものである。「沈從文の初期創作に関する一考察」（一九九二）では、「一封未曾付郵的信」、「第二個狒狒」、「西山的月」、「旧約集句——引經拋典談時事」について、聖書とアルフォンス・ドーデ作『タルタラン・ド・タラスコン』の影響を詳細に指摘し、それは単なる技巧上の模倣に止まらず、主義主張が同じ場合が多いこと、また、沈從文は主義主張を強く見せる方法も隠す方法も知っていたと分析している。「一九二五年春北京の沈從文・胡也頻と魯迅」（一九九三）は、魯迅が錢文同に宛てた手紙と『莽原』、『京報』誌上の荊有麟の文章及び魯迅の啓事など第一次資料に基づいて、魯迅と荊有麟がともに『民衆文芸』編集者の胡也頻や彼を支持する沈從文を排斥したとする。また、排斥の理由は沈從文の剽窃にあるとする件につき、石評梅が徐志摩の詩「去罷」を剽窃したとして摘発されたことに端を発する一連の事件を丹念に調べ上げ、魯迅が「我的失恋」の中で「由她去罷」と書き、『晨报副刊』から撤退した経緯を明らかにしている。また、魯迅は「強奪」（黄氏は「剽窃」と訳す）というが、「模倣は、沈從文にとつては、創作の努力を怠るということではなく、学習である」として、沈從文が彼自身を含めた新進作家の弁護に出たことを指摘する。さらに重要なのは、魯迅・荊有麟が沈從文の詩文に対し「奴隸」呼ばわりしたことが、両者の関係の悪化を決定的なものにし、胡也頻が『民衆文芸』編集を放棄し、沈從文も『民衆文芸』での作品発表の機会

を失った経過を明らかにしている。従来両者の確執について、魯迅の沈從文に対する誤解としてのみ片付けられていた通説<sup>(1)</sup>に対し、この論文は『晨报副刊』、『民衆文芸』の編集をめぐるせめぎあいが絡む根深いものであった事情を説明してくれた貴重な論考といふべきだろう。「沈從文の初期創作に見られる思想——一九二四年—一九二六年——(一—六)(一九九六—二〇〇六)において黄は、この期間の最も完璧な作品目録を作成し、郁達夫・魯迅・林宰平・徐志摩・胡也頻・陳翔鶴・劉夢葦と沈從文の交流や対立を明らかにすることを通じて、沈從文が創作で表現しようとしたものの意味を読み解こうとしている。黄は目録作成に当たり、沈從文の初期の文学評論「北京之文芸刊物及作者」<sup>(2)</sup>を新たに発掘し、この資料に基づいた貴重な研究を行っている。

② 齊藤大紀は黄媛玲の沈從文研究に触発され、「沈從文の、近代化を進める北京における文学的実験を説明」すること、「当時の文学青年たちとの交流を視野に入れ、沈從文の実験を彼らとの交流のなかでとらえなおそう」という試みから、北京時代の「都市もの」に絞って研究を進めている。「遙かな夜の路面電車——一九二四年、北京での電車開通と知識人——(一九九七)や「さまざま自寛君——沈從文『愚直の人』論」(二〇〇二)では、近代都市北京を象徴する路面電車や「公寓」さらには公園が現われた歴史から説き起こし、それらが沈從文の作品の中でどのような役割を演じさせられているか、また、どのような意味を持ったかなどをつぶさに検証することにより、沈從文の近代文明に対する受容の有様を明らかにして、作品論を展開している。また、当時の文学青年たちとの交流に焦点を合わせたものとしては、「公寓」を舞台とした胡也頻・劉夢葦・蹇先艾・黎錦明・朱湘・于廌虞らとの交流を描いた「胡也頻、湖南に行く——一九二五年六月の沈從文と胡也頻」(一九九九)、「民国北京、若き詩人の肖像——劉夢葦と沈從文——」(一九九九)、「黒塗りの部屋の詩人たち——聞一多『死水』と沈從文『還郷』——」(二〇〇〇)、「于廌虞の詩——三・一八事件、『晨报・詩鵲』をめぐる——」(二〇〇八)などがあり、彼らとの交流、

切磋琢磨を通して沈從文が小説家として成長していく過程と作品との関係を解明している。沈從文が恩人と呼ぶ徐志摩との関係については、「じよしまのささやき—徐志摩と沈從文（湘西小説）—」（一九九八）において、徐志摩がなぜ沈從文の「市集」を絶賛したのかの分析を、汪曾祺の徐志摩評—（労働人民コンプレックス）と（芸術重視）—からヒントを得て、徐志摩の「詩人と詩」（一九二三）に表された文学観に齊藤はその根拠を求め、つまり詩人の想像力—イメージを浮かび上がらせる力—の重視が沈從文の文学観（王統照評）と奇しくも一致したことにより、徐志摩と沈從文は相反する（コンプレックス）を補完し合って友情と信頼を生み、さらに沈從文は（コンプレックス）が、実は作家としての（武器）・（利点）であったことに気付いて、それ以後は湘西を描いた作品によって生活の糧を獲得していったと分析するのである。また、齊藤は「沈從文『田舎の夏』」（一九九九）において、沈從文が周作人の狂言翻訳から影響を受けて初期に戯曲を創作していたこと、さらに周作人の国語改革運動に関する意見を沈從文がどう受け止めて、「田舎の夏—鎮算土話—」（一九二五）や「話の後の話」（一九二五）のように、鎮算方言を用いた詩と散文で実践してみせたかについて取り上げる。「田舎の夏」は一見のどかな田舎の情景を描いたものであるが、黄媛瑤が「田舎の夏」を「魯迅の『夏三虫』」などから取材し、魯迅らに対してしっかりとやり返し「たものと解説するのに対し、齊藤は五・三〇事件で活躍した学生運動家が『晨报副刊』などの誌面を奪ってしまったことに対する沈從文の激しい怒りが隠されていると解説する。注目すべきは齊藤が沈從文の鎮算方言を用いた新詩の創作から、周作人と沈從文の国語や新文学に対する考えの相違を見ている点である。「周作人は、国語—文化建設のための道具—新興文学の道具」とみなし、「周作人の国語観には、深遠性と普遍性という二本の柱があった。」それに対し沈從文は、「方言語彙や文言語彙をおりませた、新たな文学表現を追求し、「新鮮な、気の利いた、真実の言葉」で作られた読者をあつと言わせるような文学を求めている」

と述べる。そこに齊藤は目新しい文学の創造によって編集者の心をつかみ、文壇に足場を築こうとしていた沈従文の周作人とは異なる立場を見ているのである。

齊藤にはまた『辺城』論―沈従文の空間意識（一九九五）があり、『辺城』の舞台である茶洞の地形が盆地であり、執筆場所が中庭であることに着目して、『水雲』や『燭虚』の記述からヒントを得て、『辺城』とは、沈従文が宇宙のもつ計画と秩序を、いかに人生に実現していくかを問直した作品』であり、『宇宙の計画・秩序を人生に実現しようとして、実現できずにいた沈従文の苦境をも意味している』と論じ、決して『エキゾティシズム』のみを描いた作品ではないと論じている。空間論は齊藤の研究方法の柱の一本であり、『還郷』論―沈従文の『壺中天』―（一九九六）に引き継がれていくことに注目したい。その他付言すべきは、論文に劣らぬ翻訳と注釈の仕事だろう。なかでも『愚直の人』（一）（二）（二〇〇一）、『北京の文芸刊行物および作者』（上下）（二〇〇五・二〇〇六）は特筆すべき労作である。

## 2. 現地調査に基づく研究

① 一九九五年前後になると沈従文の故郷鳳凰県や『辺城』の舞台となった茶洞を訪れたり、吉首大学に長期間滞在する研究者が現われるようになった。最初の長期滞在者は城谷武男であり、城谷はその研究成果を豊富な写真と平易な解説文を付した『湘西』（二〇〇七）として出版した。この本の出版により一般の日本人にとっても沈従文や湘西がどんなに身近に感じられるようになったことか、その功績は極めて大きいものがある。

② 福家道信は城谷に続いて湘西を訪れ、『湘西の旅』シリーズを一九九六年～一九九九年『中国文芸研究会会報』に発表し、そのあと『沈従文・張兆和『湘行書簡』の翻訳を『火鍋子』に二〇〇〇年～二〇〇六年にかけ十三回

連載し完訳している。この間に福家は二〇〇二年に開かれた「沈従文生誕百周年記念国際学術シンポジウム」に参加し、その報告を基に「鳳凰島の印象和沈従文研究的幾縷思緒」（二〇〇二）を発表、後にそれを日本語に書き換えて「鳳凰島と沈従文研究」（二〇〇四）を発表している。この論文では「沈従文は想像力の作家だ」とする想像力の分析をガストン・バシュラールの『空と夢 運動の想像力の試論』からヒントを得て行い、その想像力が沈従文の故郷の自然と風土から育まれたものであることを、「三王廟」についての考察や沱江にかかる橋や湘西地方特有の「吊脚楼」、「滴水床」と呼ばれる細かいレースのような彫刻が三重の縁取りそれぞれに施されたベツドや「微小な円点で構成された紋様が描かれたろうけつ染めなどの民間工芸品に見られる美意識が沈従文の藝術の根底に息づいているに違いない」と述べている。この論文の民間彫刻・民間印花布・吊脚楼に関する記述は現地調査と現地で収集した多くの資料や博物館見学(13)に基づいて執筆され、福家の沈従文文学に寄せる共感と情熱が伝わってくる。福家には他に「湘行書簡」の翻訳を基にして『湘行散記』所収の二篇を論じた「沈従文の故郷への旅——『湘行書簡』から『湘行散記』へ」（二〇〇六）がある。その中の「箱子岩」では、沈従文は一九三四年当時の湘西の国民党・共産党・湘西王と称された陳渠珍の三つ巴の抗争を背景にした中で、沈従文の「地元の住人に対する深い思い、その思いゆえに生ずる未来への不安」を描き、分隊長を癩治療の毒薬にたとえ、賀龍を「鳳凰人の手本とすべき人物」として対比させて描いたと分析する。「一個愛惜鼻子的朋友」では錢理群の分析法(14)にヒントを得ながら、韓、楊、印という熱狂的に北伐革命に身を投じた友人たちが、十四年という時間の経過によってどう変化したかを描き、「旧知の人物の一瞬の所作に表れた恐怖感を描写するという着想」に注目し、また当然描かれるべき陳渠珍が描かれなかったことに、沈従文の故郷に対する絶望の深さを読み取っている。「沈従文の故郷への旅——沈従文『鴨窠園の夜』と原拠資料の比較」（二〇〇七）は「鴨窠園の夜」を十四段落に分け、

それと原資料「湘行書簡」との比較によって詳細に解説している。福家には「沈從文の『辺城』について」（一九八九）と「『辺城』の少女と老人」（二〇〇四）の二本の「辺城」論がある。前者では「老人の古風な性格は、茶洞の自然環境のもとで実に悠然として落ち着きよく」描かれ、「自己の生と死を凝視する姿や命運的なものに対する沈着冷静な態度」を描いたと賛美している。後者では新資料「新題記」の「創作は死者と生者の断絶を救済し」「作品は不死性を獲得しよう」という考えを具現化したものであると述べ、少女の形象については「『辺城』第四章が「翠翠の個としての意識が目覚める瞬間」を描いたとして重視し、老人が翠翠の婚姻に家父長的権力を行使せずに、結果として悲劇を招いたのは、老人の記憶中の娘の姿であり、愛情の情念に捕われた若者を制御しきれないという、「人間の悲劇性への趨向への自覚によるもの」だったとして、老人の不安と孤独・断絶を描いたとして、前者をより掘り下げている。

なお、福家は「文革」中の沈從文の小説―「来的是誰？」（二〇〇九）において、文革中の一九七一年に長編小説の楔子として執筆され、黄苗子の所に三〇年余眠っていた「来的是誰？」を紹介し、謎の老人に死んだ筈の黄永玉の父親と下放先の沈從文自身をもダブらせたミステリー仕立てで描こうとした点などに、従来とは異なる手法に沈從文のやみがたい創作意欲と情熱の表れを指摘し、興味深い。福家には一九七七く七九年にかけて翻訳した『記丁玲』（正・続）があることも付言したい。

### 3. 比較研究・物語論を用いた研究

① 今泉秀人は「『辺城』・伝達の物語―沈從文と民族意識―」（一九九二）から一貫して、物語論によるテキスト分析を行っている。今泉は「『辺城』で「語られなかったこと」Ⅱ「テキストの空白」を填補すべく石啓貴『湘西

苗族実地調査報告<sup>(15)</sup>」などの原資料に当たり、テキストでは語られていない翠翠の父親と母親の悲劇は、「民族身分の違い」からくることを検証し、また文字をもたない苗族にとって、「歌」が生活の万事を表現する神話的手段であったことが「辺城」の中の隠れたプレテキストとして引用<sup>(16)</sup>されていると考え、「沈従文は『辺城』で、民族に代々受け継がれてきた「歌」を描くことによって自らを文学の中に位置付けた」と捉えている。「童養媳—沈従文「蕭蕭」の成就」(二〇〇八)は、「蕭蕭」をひとりの少女が童養媳になる物語として、「祝福」を童養媳のその後の運命としてとらえる」李愷玲の論文「沖淡又深情—従小説《蕭蕭》談沈従文的芸術風格」から触発されて、魯迅の「祝福」と沈従文の「蕭蕭」とを物語論を用いて比較した論文である。今泉は「祝福」と「蕭蕭」の語り手をテキストに沿って詳細に比較分析することを通じて、「このテキスト(「蕭蕭」)の「内包された作者」が語り手の声色を微妙に変化させることで、このことによって「蕭蕭」は、祥林嫂の死という結論からはじまる、その原因と意味をめぐる語り手の内面の劇(サスペンス)であった「祝福」というテキストを、自らの背景として批判的に取り込みつつ解体し、特徴的な女性形象に対する別の解釈を新しい独自の語りとその構成によって成就した」という結論を導き出している。今泉は李愷玲の当該論文の翻訳(二〇〇七)も行い、また魯迅の「祝福」についても物語論からのアプローチを他に二本書いており、沈従文だけでなく現当代の幅広い作家たちに目を向けて論じた「書く」ことの意味—二〇世紀後半の中国小説」(二〇〇三)も注目される。今泉の物語論による綿密なアプローチはその後の研究に受け継がれていく嚆矢となった。

② 中村みどり「沈従文—物語りと帰属の選択」(二〇〇〇)はやはり物語論による沈従文論である。中村は初期から成熟期までの作品を対象に取り上げ、「物語りにおける語り手、語られる湘西と苗族、読み手という三者の位置に焦点を当てながら、語り手の眼差しというフィルターを通して湘西と苗族がいかに語られているかを眺め、

「語り手の、ひいては沈従文自身の湘西、及び少数民族への帰属意識」について述べている。「市集」、「槐化鎮」などにおける語り手は、読み手と同じ高さに降りたり、突き放したりしながらも、湘西を外側から読み手に「彼の内面を表現するための物語り化された」湘西を語り伝えようと模索している。ところが上海時代の作品である「龍朱」、「媚金・豹子・与那羊」、「神巫之愛」などでは、「反都市文化」の象徴としての湘西と苗族の物語りが語られているとし、「反都市文化」対「都市文化」の価値の対立の上に、「苗族」対「漢族」という対立項が後から被せられ、「帰属の場を見出せない語り手の焦燥と不安とを見る。しかし一九三四年の「辺城」になると、沈従文が帰郷を機に、「都会の生活から離れて、故郷の懐の中で伝えるべき湘西の姿を、そして湘西を語る自分自身を見つめ直し、湘西の物語りの新たな出発点を見出した感動が「反都市文化としての苗族」の物語りという固定化された湘西の物語りの枠組みを衝き動かした」とし、「語り手は、完全に物語りの第三者に徹して、物語りの語りの糸を途切れさせることなく紡ぎ続けることに成功」したとする。また、沈従文という作家の魅力を「漢族」と「少数民族」、「知識人」と「田舎者」…などの「対立しながらも密接に絡み合った二つの場を彷徨しながら、「現代」の空間と時間の流れの中で浮遊する自己の生命のバランスを懸命に取ろうとしている」、「自己の帰属の場を問いながら、切実な痛みを抱えて物語りに向かう姿」にあるとする。物語論による作品分析と帰属意識を関連付けて論じた緻密な沈従文論である。

③ 津守陽「沈従文の女性形象にひそむ「郷土」——白い女神か、黒い田舎娘か——（二〇〇七）」はこれまでの中国近代文学における「郷土文学」という言葉をプラセンジッド・ドゥアラや魯迅を引用して異なる概念規定が存在することを提示し、その上で沈従文の「郷土」観を探ることを試みた論文である。津守は「沈従文の「郷土」にむける眼差しの微妙な非均一性」に目を向け、沈従文の作品に描かれた「素朴な女の子」像の変遷を年代を追っ

て検証している。一九二八年の作品「雨後」、「探蕨」、「雨」のヒロインはみな黒い肌の少女であり、彼女たちに共通するのは満ちあふれる性的魅力であるとする。ところが一九二九年の「龍朱」、「媚金・豹子・与那羊」、「神巫之愛」に登場するヒロインは白い肌・白い服・長い黒髪の女性像であり、彼女たちに共通するのは光り輝く美貌で、彼女たちが歌うのはロマンティックな叙情詩であるとする。そして一九三二年から三三年にかけては、この二つの系統が一つの作品の中に混在し、同一人物上での融合を始め、一九三四年の「辺城」の翠翠では、すっきりと浄化され、美しい顔立ちと野性的な黒い肌をもった少女となるという変遷を経ていることに津守は気づき、「これらの女性たちは沈従文の湘西作品において「郷土」を代表する記号的機能を果たしている」と捉え、「彼の中の湘西は不断に更新されている」と述べる。この論文が湘西小説に見られる女性像の外見的特徴を取り上げたのに対し、次の「郷土」を溶かす内面の空白―沈従文の女性像から―（二〇〇七）では、「三個男子和一個女人」（一九三〇）を取り上げ、同じ湘西小説でありながら、「具体的なイメージが欠如」した女性は、不可解な自殺と死後豆腐屋によって洞窟に運びこまれ、青い菊で全身を覆われて石のベッドに横たえられた裸身として突如読者の視角にイメージされるが、その内面は依然として空白のままである点に津守は注目し、沈従文は男性を破滅に導く女性像をこの内面の空白によって、人類にとって不可知のものレベルにまで昇華させた述べ、沈従文の湘西小説のバリエーションの多様さを魅力的に指摘した。「郷土」をめぐる時間形式―沈従文と「不変の静かな郷村」像―（二〇〇九）では、ジュラルール・ジュネット著『物語のディスクール―方法論の試み』の「括復法」を用いて沈従文の「郷土」を描いた作品における時間を分析し、初期（一九二四―二七）、過渡期（一九二八―三〇）、成熟期（一九三二―三八）の代表的作品を取り上げ、他の郷土作家（許欽文、蹇先艾）の作品とも比較することにより、沈従文の湘西小説の際立った違いを指摘して論じる。津守自身の総括によれば「沈従文の時間表

現は都会との接触を契機として始まり、初期湘西作品において閉じられた夢の世界としての「不変の鄉村」を形作っていた。一九三〇年頃に至ると湘西の時間は動き始め、静かな鄉村は不可解な異常を隠し持つようになる。そして一九三四年頃には、作家の帰郷を契機に万古不変の湘西像が確立し、同時に主人公の時間が心理に忠じて伸縮するようになる」という。津守はこのような時間表現の変遷は湘西小説のみに見られるのではなく、都会小説でも同じであることを「公寓中」、「八駿図」を挙げて検証している。また、「辺城」と「八駿図」とを見比べて、「辺城」が示す高度な叙情性と陰影の奥行き」にこそ、沈從文が「湘西から汲み出した文学表現の豊かさを知ると結んでいる。津守の論文は極めて精緻な優れた論考である。

#### 4. 上海・武漢・青島時代の沈從文研究

① 中野知洋は沈從文の北京時代から上海・武漢・青島時代にかけて（一九二四～三三年）の作品と彼が創刊に係った文学雑誌を取り上げ、実証的手法で手堅く論じている。「沈從文の軍隊小説について」（一九九七）は従来作品分類に対して異を唱え、沈從文の湘西における従軍経験を基に創作された小説を「軍隊小説」と位置付け、「移動する近代社会の母型としての軍隊」が沈從文の郷土文学を生み出し、沈從文にとって軍隊生活は近代社会に触れる接点であり、「都市の活字メディア」が「軍隊という流通の制度を経由することにより」もたらされたという視点は新しく注目すべきである。「沈從文小説における時間描写の側面」とくにその北京滞在期の作品について」（一九九八）では、沈從文の初期の都市ものに分類される自伝・日記体の小説において「時間」の扱われ方について初めて論じたものである。中野は一九二四～二五年の最初期の日記体の「公寓」を取り上げて、日付と時計が主人公の心理状態を表す小道具として用いられていることに注目し、「道というメタファで表現された時間

とは、都会を取り巻く直線的な時の流れだろう。主人公の苛立ち、自分が原初より持っている、境界の田園世界における時の流れとの乖離によるものである」と述べ、沈従文が都会に出て来たことによって、初めて田舎との対比で「時間」を認識し、時計の音に象徴される直線的な時間にせかされる都会生活における心理状態を描いて見せたとする。一九二六年以降の作品「一個晩會」ではモンタージュの手法を用い、時計の刻む時間によってプロットが展開するという構成を取っているとして、単純な自伝的内面告白からの進歩が窺われると述べる。中野のこの「田園世界における時の流れとの乖離」という視点は津守陽論文<sup>(10)</sup>によって反論されるが、中野が沈従文の都市小説を論ずる中で「時間」に注目した先駆的意義は評価されよう。中野の仕事で特に注目されるのは、復旦大学留学中に涉獵した中国公学大学の資料に基づく研究である。「吳淞における沈従文」(二〇〇一)は、上海時代の沈従文について従来新月派とのかかわりのみで論じられてきたが、中国公学の学生を中心とする吳淞文壇が形成されていたことを『白虹』、『中国文学季刊』、『新東方詩刊』、『現代学生』などの雑誌の存在から明らかにし、これを指導したのが中国公学の教員たちであったことを学生(王一心・劉宇・孫佳訊・傅潤華・何家槐・羅爾綱など)たちの謝辞から裏付けている。また、この時期の作品「冬的空間」、『第四』、『自殺的故事』がいずれも吳淞および中国公学の日常生活に取材したものであると考えられるとして、『冬的空間』論―岳萌をめぐって―(二〇〇〇)など、この時期の「自殺」というテーマをめぐる一連の作品論を発表している。「兵士と婦人―武漢時期の沈従文小説」(二〇〇一)はこれまでの研究の盲点であった武漢時期の沈従文について、武漢大学の档案館所蔵の資料に基づき沈従文の講義録「新文学研究」の内容を明らかにする一方で、武漢時期の小説としては「道德与智慧」(一九三一)を取り上げ、規律正しい湖南の兵士と比べ汚く、愚かである武漢の兵士に対する愛情と嫌悪が、主人と下女の楊媽の形象によって表現されていると述べる。「都市一婦人」(一九三一)では、「自らの

哲学に従って行動するという明確な主体性を賦与された女性（とくに娼婦）が主人公としてこの時期から登場することに注目している。「上海事変と沈從文の戦争小説——「懦夫」をめぐる——」（二〇〇五）は上海事変後に発表されたが、これまで論及されることのなかった「懦夫」、「黒暗占領了空間的某夜」、「戦争到某市以後」の三篇を取り上げて、「報告文学に同調することなく、消費される戦争報道の中に形成されつつあった文脈、大きな物語へ参与することを拒むという、言わば戦争を対象化する試み」であったことに意義を認めている。

② 中野徹「八駿図」考——沈從文における、ある物語の成立——（二〇〇一）は「八駿図」の成立時期についての考証である。中野徹は「水雲」でいう一九三二年青島執筆説や沈從文の証言による一九三三年説を綿密に考証した結果、その構想は一九二七年の北京滞在中まで遡ることができるが、『文学』掲載の一九三五年八月と考えるのが妥当ではないかとの結論に達している。今後の「八駿図」の読み解きが期待される。

## 5. 民族問題に関する研究

土屋美津江「沈從文におけるエスニシティとナショナリティ」（一九九五）は沈從文再評価の流れの中で沈從文が少数民族の作家であるということがクローズアップされているが、彼は少数民族としての民族意識を持ちながら、中国人としての意識も持っていたことを論じている。つまり蕭乾の場合は時の情勢に應じて、自分の所属する民族は着脱可能であったが、沈從文の場合は漢民族への帰属意識は極めて希薄であり、さりとてダライ・ラマのように中国からのチベット独立を主張するようなものでもなく、苗族としてのアイデンティティーの上に立って、中国という国家の中において漢族や他の民族と同等の権利を主張する中国人の意識を持っていたことを「苗民問題」「湖南的西北角」などの文章から導き出している。

## 6. 「辺城」・「夫」・「月下小景」論及びその他

① 佐原陽子「沈從文の断筆に関する一考察」(二〇〇二)は沈從文の断筆について、従来は当時の政治状況と郭沫若の沈從文に対する批判「斥反动文芸」などをあげて、外的圧力によって「逼上梁山」されたと見る汪曾祺の解釈<sup>(17)</sup>をとるものが多いが、佐原は沈從文の自殺未遂事件と断筆を関連付け、四〇年代における作品数の減少から、「創作方面においてある意味で方向性の変換がゆるやかに進んでいた」という彼自身の内的欲求も相俟って、若い頃から嫌いではなかった文物研究に転じたのではないかと見て、沈從文の作家としての行き詰まりを掘り下げて論じ、故郷の鳳凰県の名に恥じず、死してふたたび再生したと捉える。「辺城」における河の働き(二〇〇二)は「辺城」においてヒロインの内面が語られることは少なく、河の表情が翠翠の心理を表す暗喩として描かれ、また人物が大きな変化を遂げる際の象徴的なきっかけ(境界)としての働きを示していると論じる。

② 上田なおみ「日本における沈從文研究状況」(二〇〇一)は執筆当時までの沈從文研究を大まかにまとめたものである。

③ 藤田理佳「『丈夫』について——遊女描写から考えられること——」(二〇〇四)は「丈夫」という作品がこれまで凌宇や呉立昌によって「夫の麻痺した魂が人間的に覚醒していく過程を描いた」と夫の側からのみ評価されてきたことに対して、遊女となった妻の描かれ方に焦点を合わせた読みを示した論文である。妻について藤田は「愛情に対して勇敢で誠実である」からこそ、家族の為に、遊女になることも厭わず、「情」が損なわれるようであれば、遊女もやめて、田舎に帰るのだ。人間らしくあるためには、自分にとって何が大切か、譲れないものは何か、本能的に心得ている。「遊女を生業とする妻の視点から見れば、『麻痺しない魂』を持ち続ける「人間性に恃らぬ人生形式」を生きている遊女こそが描かれた作品である」という女性ならではの見方を示している。

④ 吉野尚政『月下小景』について—仏教説話改作から見えること—(二〇〇〇)は『月下小景』の仏教説話を題材とした物語を取り上げて、材源との比較による解説を試みている。とりわけ小島が一連の『月下小景』考<sup>④</sup>で論及し残していた「狐人故事」について、二羽の雁は胡也頻と丁玲を、亀は沈從文を当てはめて読み解いているが、興味深い考えである。

⑤ 井上裕子「水に流れた結婚物語としての『辺城』」は『辺城』を恋愛物語としてではなく結婚物語として捉える。それは翠翠を取り巻く男たちの視点から見た『辺城』論である。つまり、この物語は翠翠との結婚を前提に進行していて、翠翠の心は空白のまま残されているからであるとして、天保大老が溺死したことによってこの結婚話は水に流れたことになるという。井上は『辺城』において水が重要な記号として機能していることが道家思想と深い関係があると指摘し、道家思想による儒家思想の排除だとも読めるという読みを示している。祖父の死によって翠翠が初めて自立し、自己意識の確立をさらに進めることになり、未来への希望を読者に与えるという読みはユニークである。

以上、研究方法による分類紹介を試みたため、記述に精粗が生じ、取り上げられなかった論文もあることをお断りしたい。最近の研究傾向の特徴としては、①中国で公開された檔案館資料に基づく研究、②現地滞在によるフィールドワーク、③物語論による作品論が挙げられる。いずれも初出掲載誌に当たり、より精緻で、実証的な研究がなされるようになってきていると言えよう。

注

(1) 『誌上同窓会』第六号所収 一九八六年六月出版。

(2) 長沙から鳳凰県まで高速道路ができ、所要時間は約五時間。今回は名古屋外国語大学の沈從文研究者黄媛玲さんと九州産業大学の周作人研究者呉紅華さんが同行された。

(3) 『吉首大学学报』第四期所収 一九八六年出版。

(4) 『明海大学外国語学部論集』第一七集所収 二〇〇五年出版。

(5) 『野草』第八四号所収 中国文艺研究会 二〇〇九年八月出版。

(6) 拙著「魯迅と沈從文」(魯迅と同時代人)所収 一九九二年 に於ても、「海派」・「京派」論争を論じる際に、「沈從文文集」所収の文章が一九八二、八四年の段階で修正されたために論争そのものの論点すら曖昧模糊としてしまつて、当時の論争を正しく把握するには初出に当たることが如何に大事であるかを指摘した。

(7) 丸尾常喜著「魯迅―「人」と「鬼」の葛藤」岩波書店 一九九三年出版。

(8) 講演会における発表は、吳曉東(「長河」)中的伝媒符碼―沈從文的國家想像和現代想像―と齊藤大紀「日本における沈從文研究」であつた。

(9) 沈從文著「沈從文小説選集」所収 人民文学出版社 一九五七年出版。

(10) 沈從文著「從文自伝」第一出版社 一九三四年出版。糜華菱編「沈從文生平年表」による。

(11) 陳漱渝「魯迅与丁玲」「丁玲研究資料」所収 天津人民出版社 一九八二年出版。によれば、丁玲が一九二五年四月に魯迅に援助を乞う手紙を出したが、その筆跡を荊有麟が見て、「丁玲」は「休芸芸」(沈從文の筆名)の仮名だと独断的に言つたことから、魯迅が沈從文を誤解したという説。

(12) 沈從文著「北京之文芸刊物及作者」『中華基督教教文社月刊』一九二六年一・二・三・六月号掲載 中華基督教教文社 一九二六年出版。

(13) 『湖南民間藝術全集 民間彫刻』、『湖南民間藝術全集 民間印花染布』湖南美術出版社 一九九四年出版、『湖南民間藝術叢書 湘楚木彫』湖南美術出版社 二〇〇〇年出版、『湘西城鎮与風土建築』天津大学出版社 一九九五年出版 など  
の記述や吉首市の「秀華山館」見学に基づいている。

(14) 銭理群著「一個世紀性話題的沈從文式思考」趙園主編「沈從文名作欣賞」所収 中国和平出版社 一九九三年出版

- (15) 石啓貴著『湘西土著民族考察報告書』一九四〇年 を基にして湖南人民出版社から一九八六年出版された。
- (16) 津守陽「郷土」をめぐる時間形式—沈從文と「不変の静かな郷村」像—『日本中国学会報』第六十一集 二〇〇九年

出版

- (17) 汪曾祺「沈從文転業之謎」『長河不尽流』所収 湖南文芸出版社 一九八九年出版
- (18) 小島久代「沈從文——人と作品」汲古書院一九九七年 第三章その一、その四